

陶器
附

画工秘傳新書

全



和装本

子 9

849

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

多岐門
249
卷

画工秘傳

新書

江岳



叙

陶器まは人の世帯よふ一りも欠く
 つこのこきも乃物ものあり固こく各かく
 國くに僉あ之のを固こめ質しつをたみ
 美みを求もとめ其製そのせいを勉べん強まじやうせよ

必傳新書

序一

あつを掲げ秘傳新書と題し
 一冊子といふ做しぬ之を見て之を製
 せむ苦まずしと忽ち瀬戸の友也印
 たらん嗚呼世を聞けらるか耶

梅亭鶯叟識

焼陶器 画工秘傳新書

東京

江藤時太郎編輯

凡て陶器は森羅萬象を画らんとするは先良品ある繪
 の具を貯へ而して之を調合せんとす其第一とする有
 用品は白玉あり白玉は則ち陶器の元素として緊要と
 するものあり然れども白玉は性質石を以て製したる
 品おれば硝子の粉と同物にして之を用ゆること難し
 故に今繪の具調合より始め練加減或は煮皮の解

方等其他陶器画工に総て要用なる法を記して之を
傳へんとし陶器画工を業とする者熟読せむんば
べらむ左に其目錄を掲る

總目錄

繪具製方

- 白盛 呉須 紺色 桃色 紫色 赤色
- 黄色 青色 金盛下
- 練方の法 附り器械の圖

筆の用法

煮皮煎方 附り生地へ煮皮を引加減

金箔の消方 附り用法

陶器画工に用ゆる機械之圖

下画の建方

白盛の上を粉色せる法

色替りの金を遺ふ法

墨釜模様 附り内釜外釜の圖

焚金模様 附リ仕揚の次第

以上

繪の具製法

- ① 白盛製 ○ 白玉十五匁 ○ 唐ノ土十三匁 ○ 日ノ岡二匁 ○ 右三種を混合して白盛と云
 - ② 呉須 ○ 白玉六分 ○ 唐ノ土一匁 ○ 黒呉須二分 ○ 白呉須一匁 ○ 右四種を混合して呉須と云
- 用法 右の呉須を以て墨の如く骨畫等ふ凡て用ゆ

③ 紺色 ○ 白玉二匁 ○ 唐ノ土三匁五分 ○ 西洋紺上四匁

右三種を混合せ

④ 桃色 ○ 金箔十枚 ○ 白玉二匁 ○ 硝子種一匁

右三種を混合せ

用法 桃色の白盛小割加へて用ゆべし 赤金色を加ゆるは白盛の度を焼付て赤色を出せ爲ふ用とせ

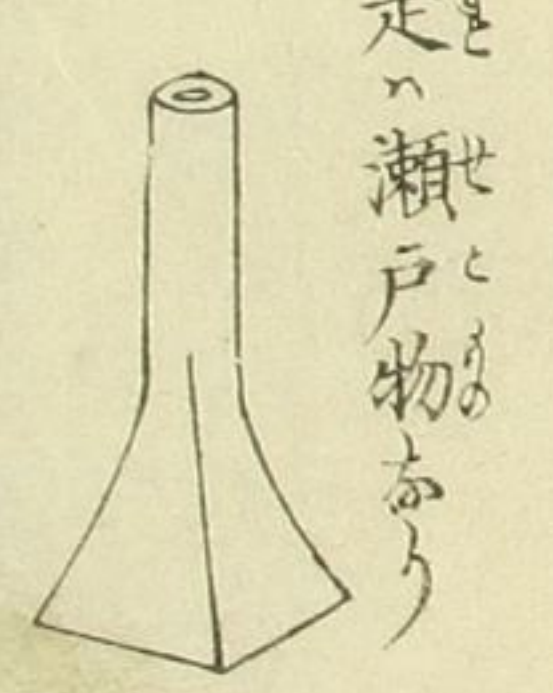
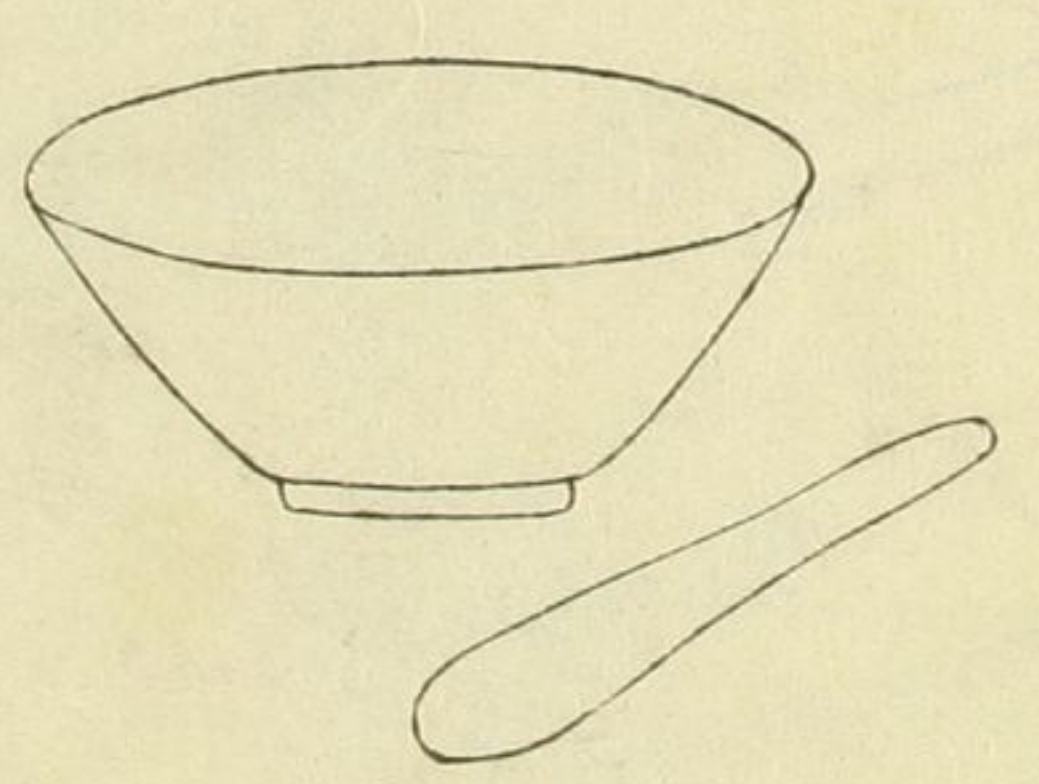
⑤ 紫色 ○ 白盛、紺上、桃色の二種を滴宜小加へて紫色を出せことを得べし

- ⑥ 赤色せきしき○白玉しらたま十五匁ご○唐ノ土からつち十七匁ご○朱良べんざら四匁ご五分ご
日ノ岡ひのかり一匁ご○極最上朱ごくさいじょうしゆ二分ご五厘ご 右五種ごごしゆを濕合うるま也
- ⑦ 黄色きゆうしき○白玉しらたま十五匁ご○西洋白せいやうはく二分ご○唐ノ土からつち十三匁ご○
日ノ岡ひのかり一匁ご朱良べんざら三分ご 右五種ごごしゆを濕合うるま也
- ⑧ 綠色りよくしき○唐ノ土からつち十六匁ご○白玉しらたま十四匁ご○白綠しろりよく一匁ご五分ご
西洋白せいやうはく一匁ご五分ご 右四種よんしゆを濕合うるま也
- ⑨ 金盛下きんせうげ○白玉しらたま十五匁ご○金きん一分ご五厘ご○日ノ岡ひのかり二匁ご六分ご○唐ノ土からつち七匁ご五分ご○朱良べんざら八匁ご七分ご 右五種ごごしゆを濕合うるま也

合あして金盛下きんせうげ小用せうりやうゆ

繪ゑの具ぐ練ね方法ほうほう

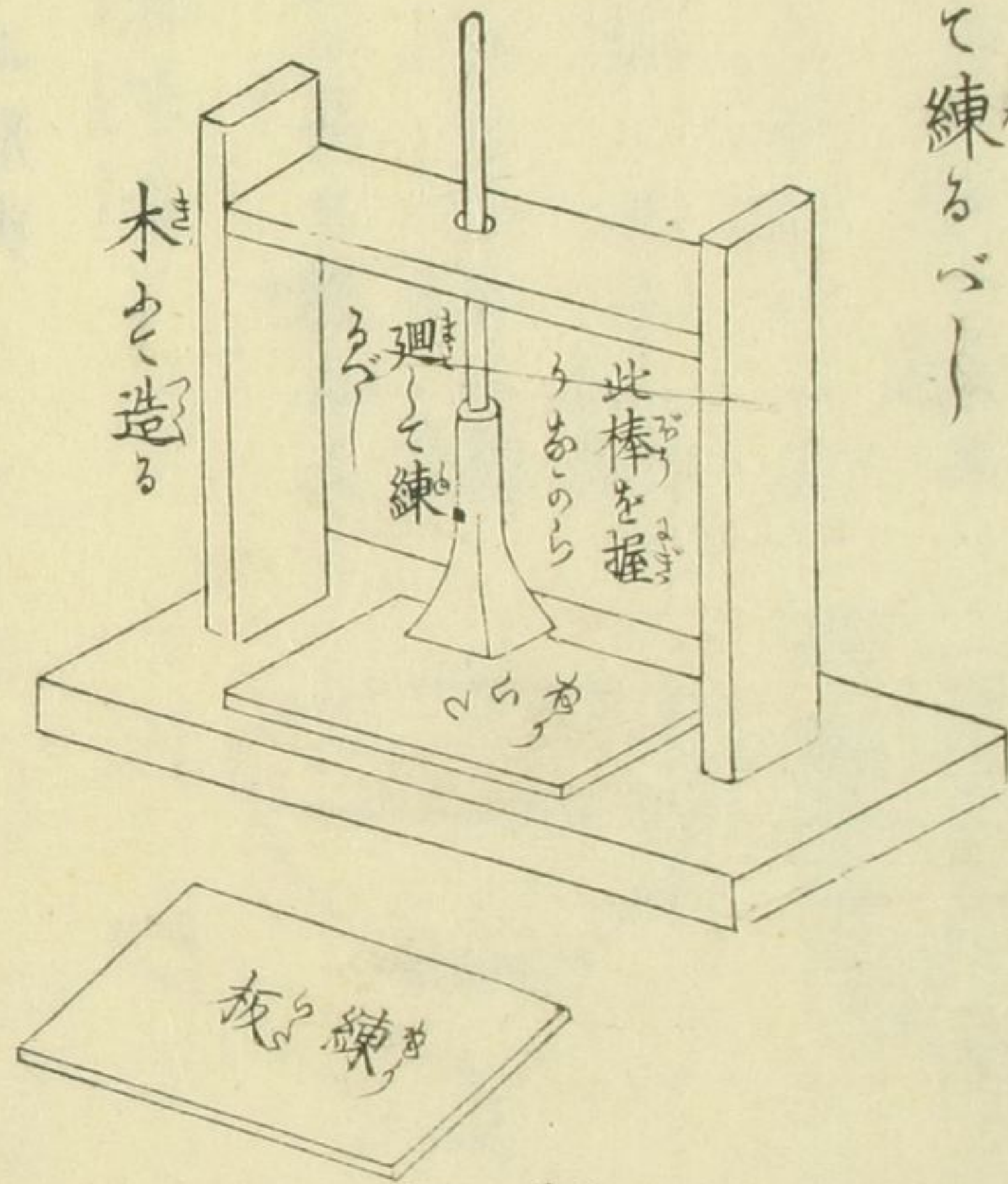
總すべて調合てうがふせし繪ゑの具ぐを練ねらん
 とせらふハ圖ずの如ごとき陶器せうぎの鉢はち
 へ右濕合みぎうるましたる繪ゑの具ぐを入いれ乳ちゆう
 棒ぼうを以もて凡たゞそ十五日間じふごにちかん練ねべし又
 試こころみ小用せうりやうひんとせらる時ときハ先まづ三
 匁ご合あせの繪ゑの具ぐあれば凡たゞそ十



是こゝハ瀬戸物せとものなり

時間と知るべし亦多分練貯わるとするふい左の圖の如き器械を以て練るべし

繪具の練器の械



是は瀬戸物なり

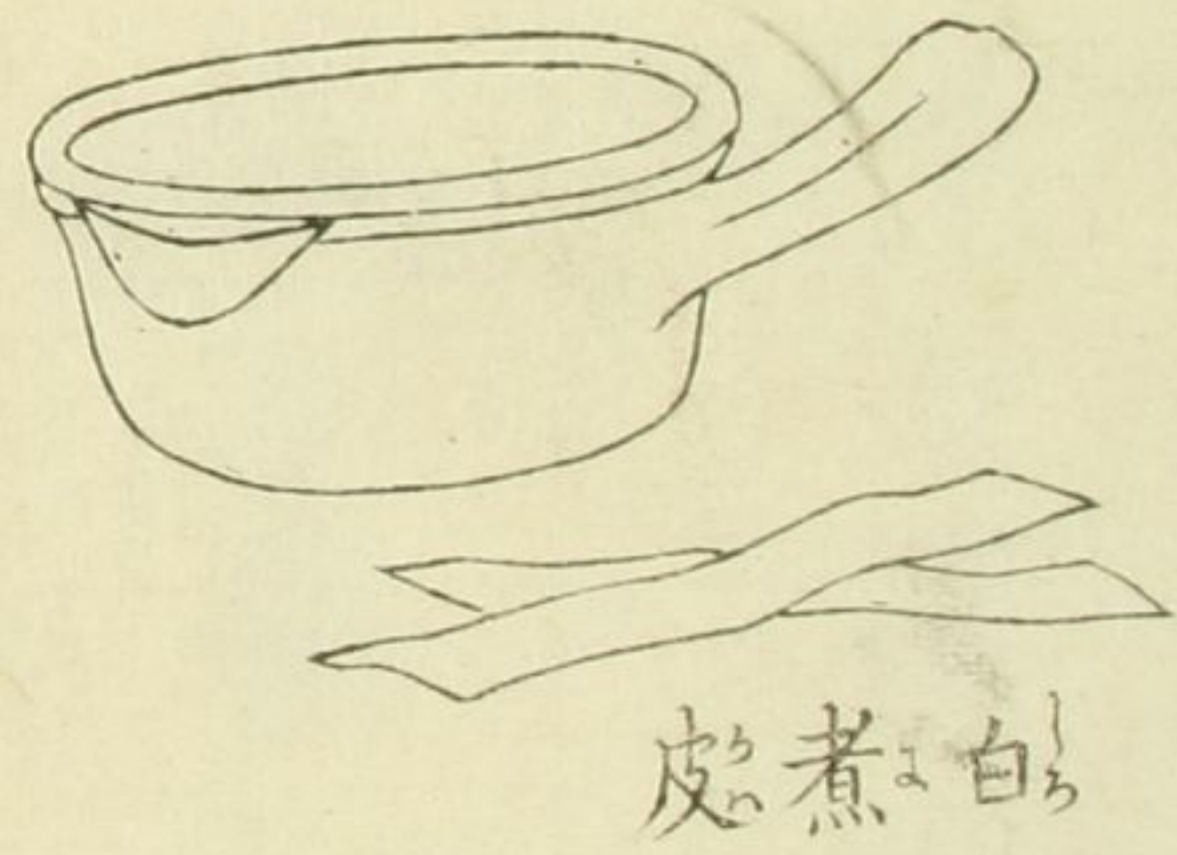
筆の用法

陶器又書画を爲さんと欲せば圖の如く筆を堅く握りて書べし若軽く



持ちて画らく際其筆の毛烈々當り筆小付いとる繪の具を引ふ自在を得ぬ故堅く握りて遣ふべし然

る時ときハ自然あつらら自在いざないを得うる
 小こ至いたること妙たぎあり又また手平てひらよ
 う手首てくわ又また掛かる切きハ鷹天たかてん絨じゆうを
 以もて良よと云い此切このきを用もちゆる以い
 所ところハ陶器とうきの生地きぢへ煮皮にひを引ひ
 き何なにるゆへ人ひとの手肌てむぎのさわ
 ることを禁いむるが故ゆゑあり若もく切きを當あぎて画ゑがき
 手肌てむぎよても陶器とうきの生地きぢへさわ
 る際ときハ書上かきあよる圖づ如斯ごと



皮煮白

く散ちりて繪具えのぐを消けえ至いたきハ能々よくよく注意ちゆういすべし

煮皮の煎方

圖づの如ごとき土鍋どなべ水みづを入いて其中そのうちへ白煮皮しろにひを入いよく解と
 ろして用もちゆべし丸まるを解とく加減かへんハ圖づの如ごとく分量りやうりやうして其その
 差別さべつハ滴宜てきぎ小用ちゆうひて然しかあり

煮皮を生地へ引法

前まへ又また煎せんたる煮皮にひを能よき加減かへん小温ちゆうめ布巾ふきんの端はしを水みづ小
 て示しめ後のち煮皮にひ又またひたし其布巾そのふきん小生地きぢをふく如ごとく

塗引べし然る時薄く付て陶器の肌を顯へし總ての
 繪の具を用ひて画かくとも僅少も虹むおとあし若生
 地へ煮皮を引らむし直ち画かくとき其繪の具何
 れも虹を散て筆意を分つおと難し故煮皮を用ひて
 其緊要あるおとを知るべし又煮皮を引き用ひんとし
 るふに必ず注意してむらのおき様ふ為べし万一むら
 の出來たる物を構へて画かくば後よ返つて損失を
 生るることあるべし

金箔消方の法

金箔を凡そ一分程消さんと
 為るふに圖の如き極薄き皿
 へ七よて解煮皮一杯を入其
 中へ金箔をひと皿を火よ
 りふり能々温め而して煮皮
 の手くを量り手くに随つ
 て手き口より二本の指みて徐々と煉出さべし斯の如



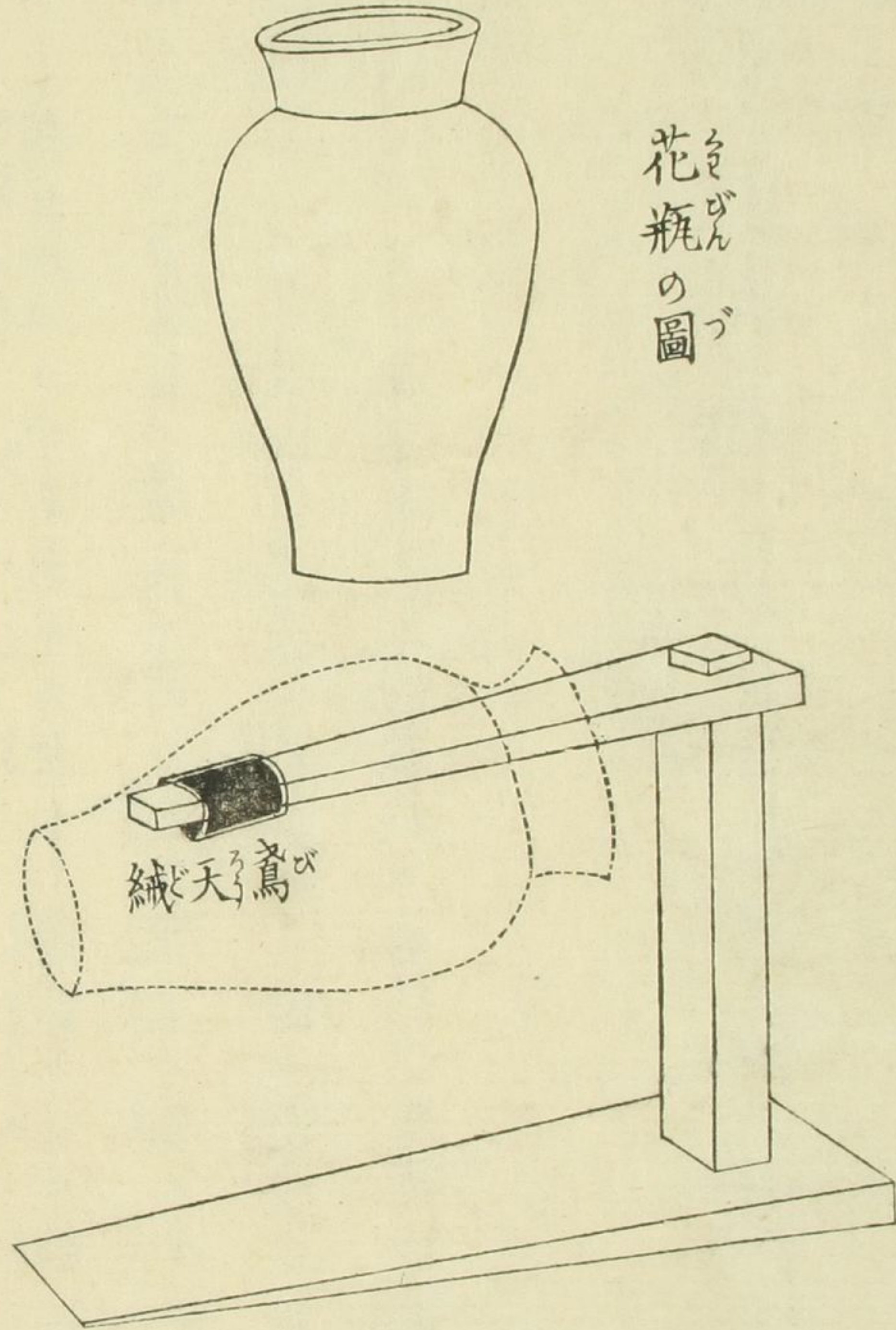
くせりうち全たく煮皮の于まければ又前の如く七ふ
て水を一杯入も再び火よ何ぶりて出するべし斯のご
とく為ること度々おまは遂は金箔を消て其皿小摺付
あり然る後再び指ふておせることおられ若重ねて
おまらんと為れば金箔の焼る気よさららひ指の油を
呼出して金色を衰へ其色白く土の如くおある物お
り能々心を用ゆべし亦右の如く焼付たる金を取んと
せりふに僅少つゝ漸々お水を入れて後指ふて解き流し

べし稍其水皿の中お過半お至りし頃亦々火よ拭て温
めるあり然まれば煮皮の湯と共お浮上り金の皿の底
へ沈むを見て其湯と煮皮を絞り捨て皿お残付たる金
を能々干りし其于きたる後是れをけづりとりて用ゆ
べし

陶器画工に用ゆる機械圖

如圖花瓶へ画を画らんとするふに斯の如き機械へ指
込て画くべし

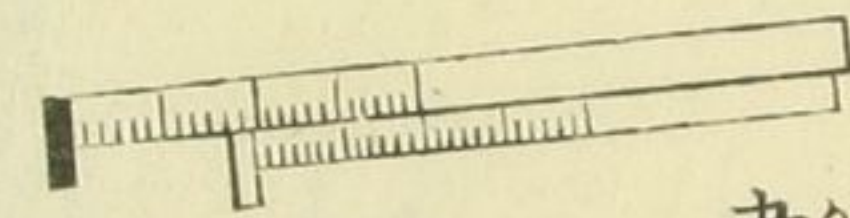
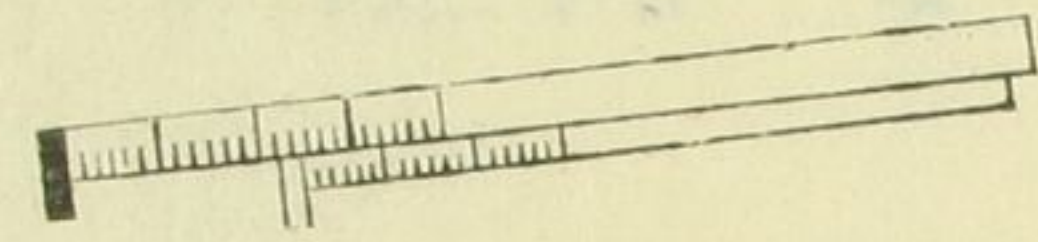
花瓶の圖



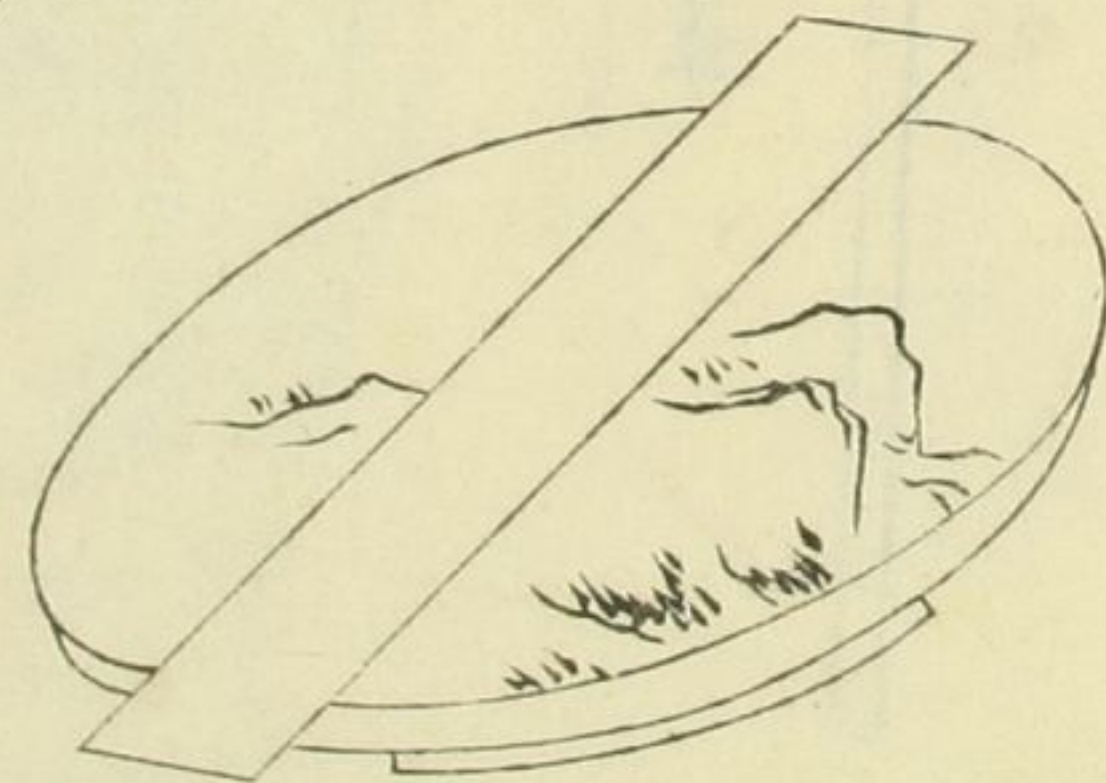
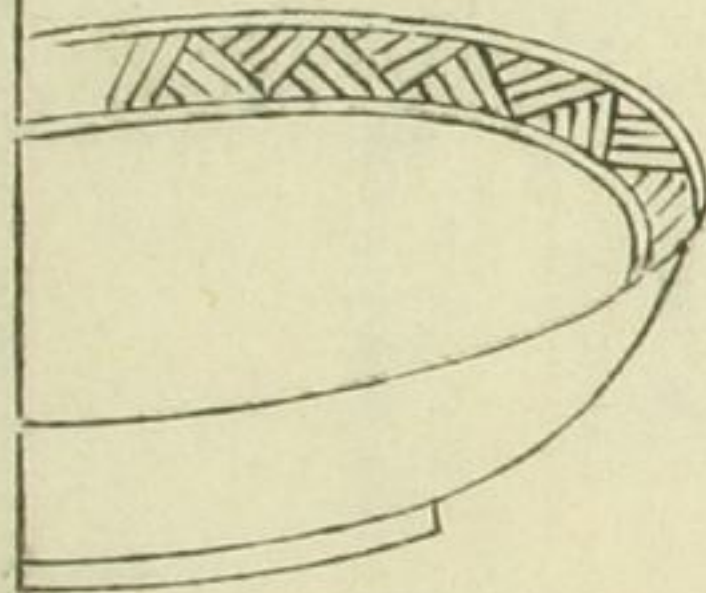
緞天鴛

其二

陶器のへりを取ふの如き墨付を用也



墨付



皿の模様へ此こく板を渡して書べ

○印の中へ画を

為んとするふ

の先白紙にて

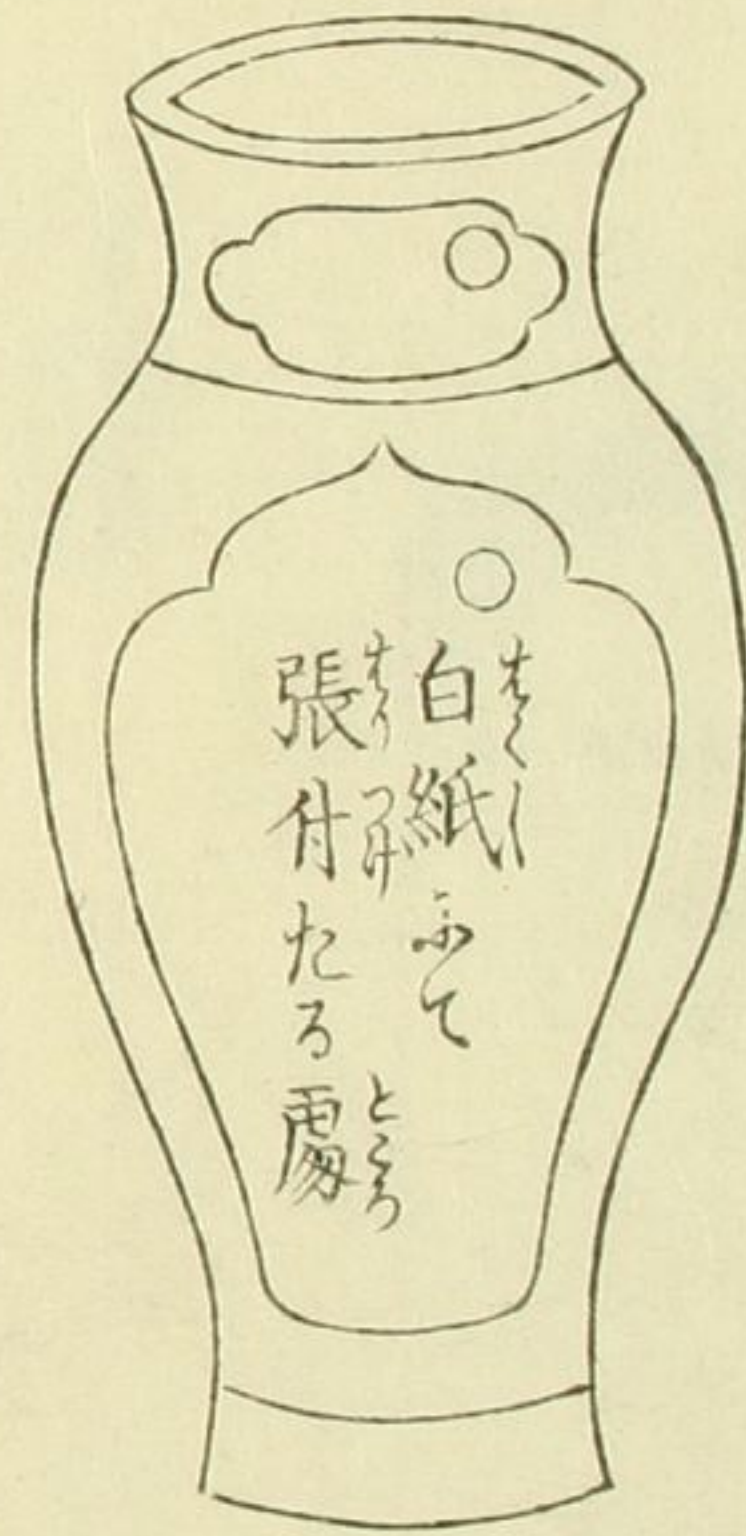
圖取を極而し

て白紙を切抜

煮皮ふて張付

其後淵を墨ふ

て書とるべし



金粉拂筆



下画の用法

きりふりの雛形

法曰洋紅を煮皮

ふて解く以て

下画を為せば

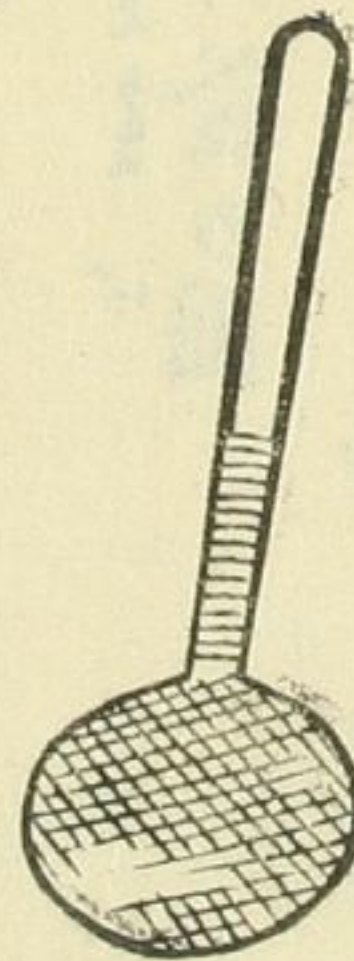
圖取の其器は因て割出し滴宜ふ認む可あり

白盛の上を粉色をせる法

法曰白盛の上を粉色をあさんとせるふハ解煮皮を極

々柔らぬ筆ふ付て白盛の上を徐と引暫時予くを見て

筆



其上その上種々いろいろ粉色こないろをまぜべし

色替いろかりの金かねを遣つふ方かた

法ほう曰い一名ひと二重にじゆう金かねと云い是こゝは金かねの中ちゆうへ赤色せきしきの繪ゑの具ぐを分ぶん量りやうして十分じふぶんの一ひとを加くわし而しかして水みづを七分しちぶん解とき煮皮ぬい三分さんぶん濕合しんごうして用もちゆる者ものあり

墨金すみかねの模様もよう附つ内釜うちかま外釜そとかまの圖ず

此處こゝへ圖ずせるし即ちすなはち内釜うちかまにして總まと書揚しきあげたる陶器とうきを

釜かまの中ちゆうへ

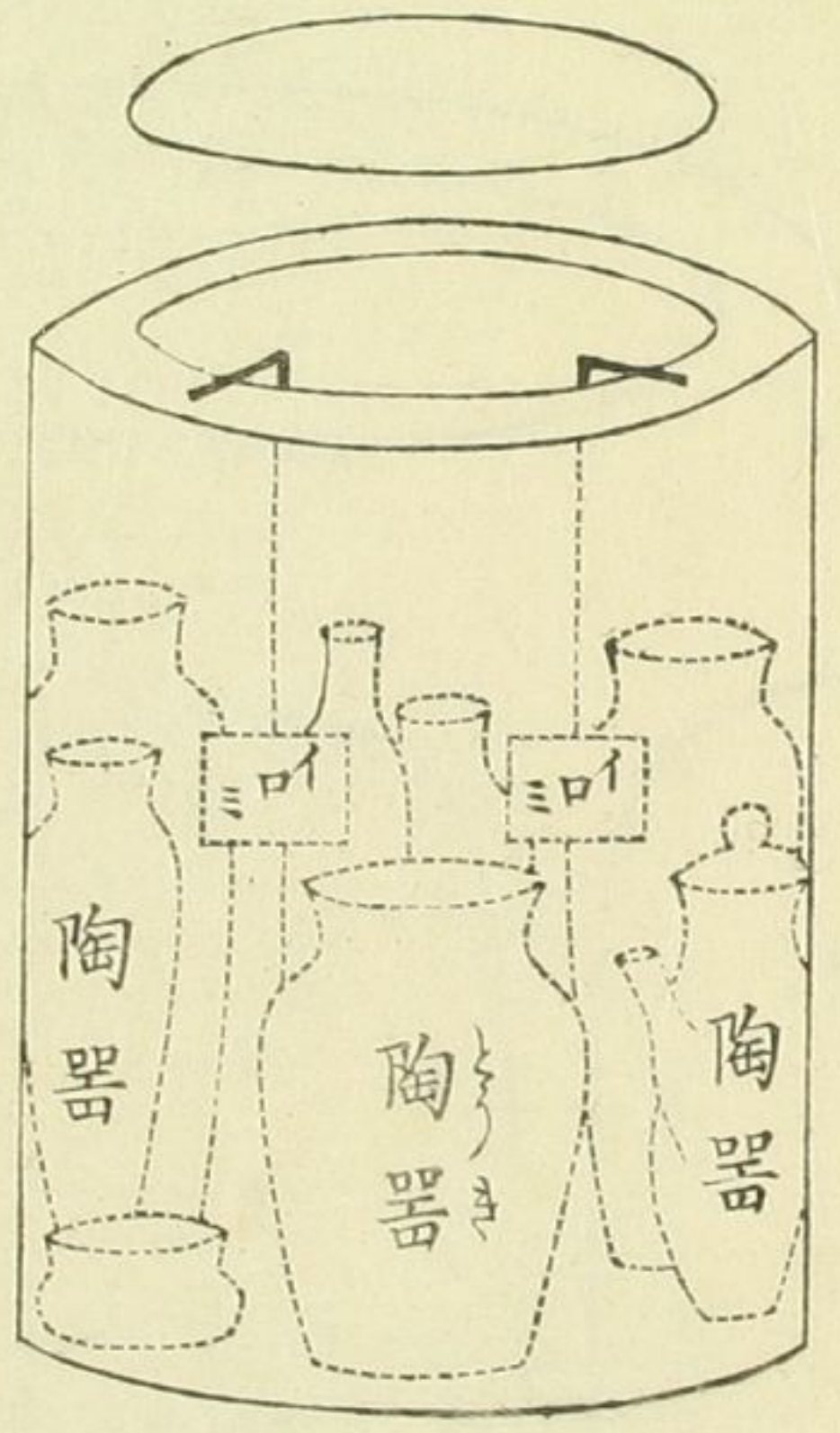
程ほどよく入いり

て滴宜てきぎふ

並ならべ其中そのちゆう

へ俗ぞくよ色いろ

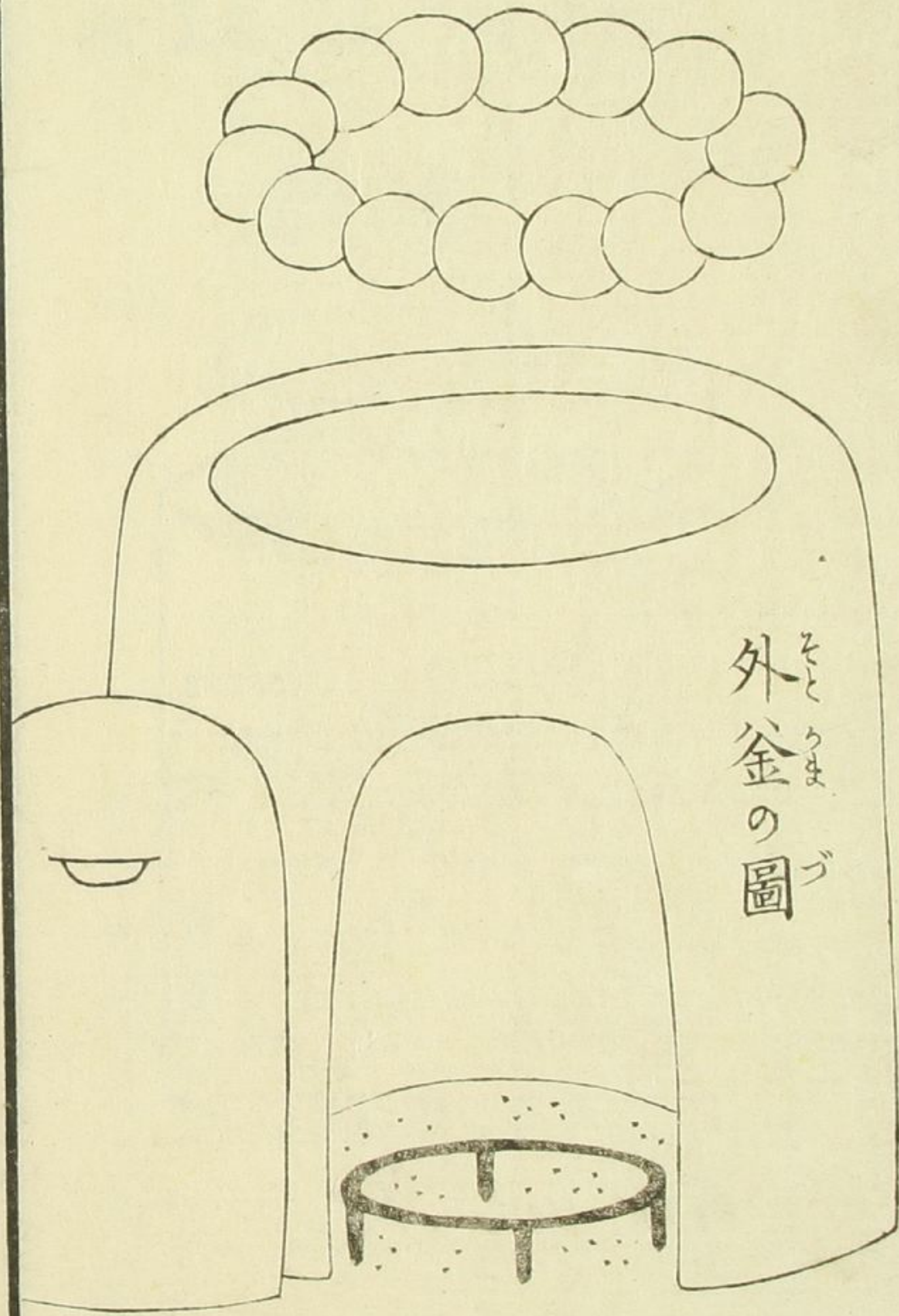
釜内かまうち



こと名付なづけて焼上やきあがりの度どを檢察けんさつれぬ圖ずの如ごとき薩摩さつま焼やきの欠かふ金かね盛み或あるは五色ごしきの繪ゑの具ぐを塗付ぬりつけ細こき張ちやう金かねふて是こゝれを縛しむり付つけて試こころみに下さけ蓋ふたをし外釜そとかまふ入いるあり

右内釜を外釜へ入きて焼あり其圖左の如く

圖のけらじの



外釜の圖

此圖の前より著しける内釜を外釜へ入たる圖みて已ふ

外釜の下の
外釜

五徳の上

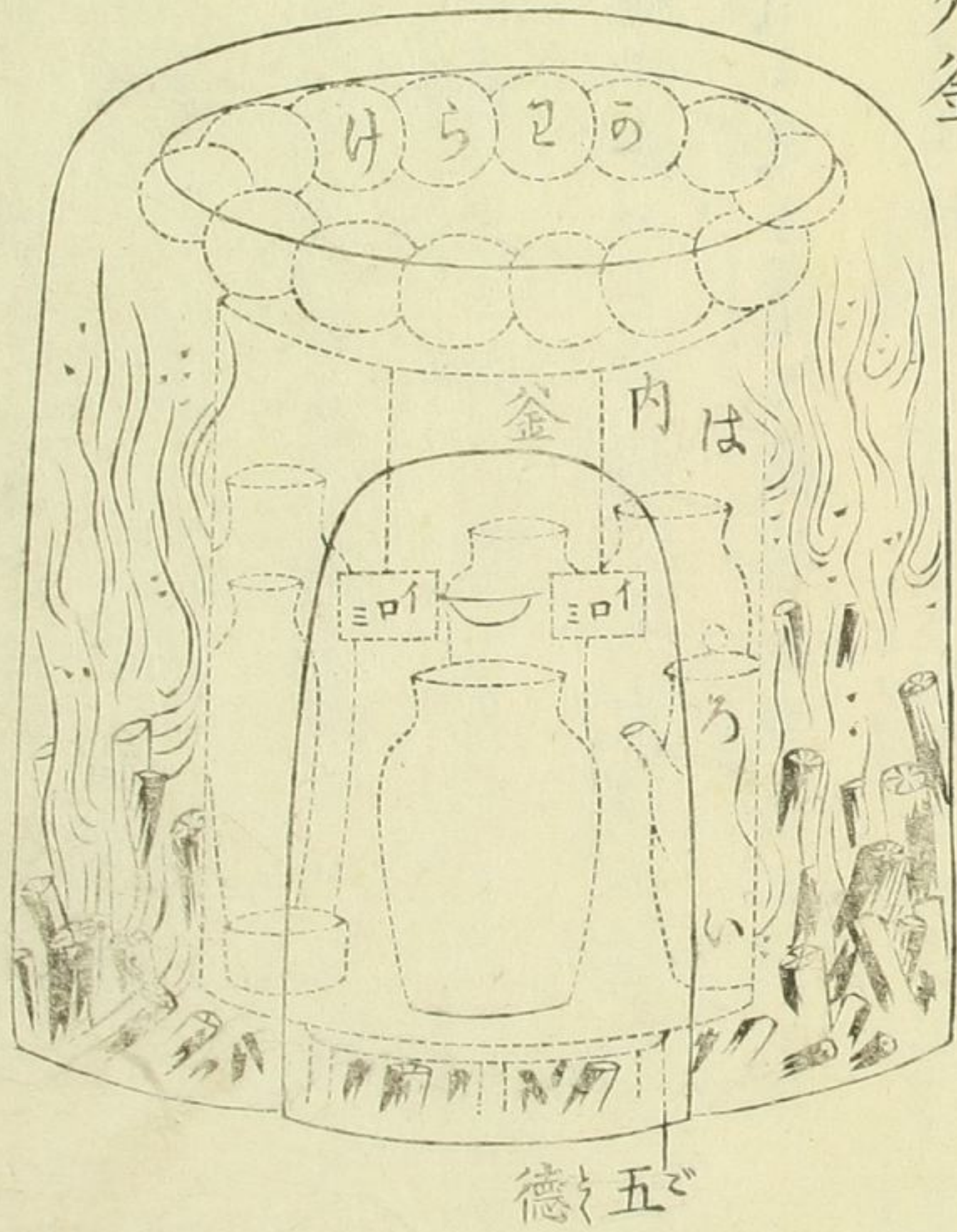
備廻り中へ

松墨を詰是

れを火より起

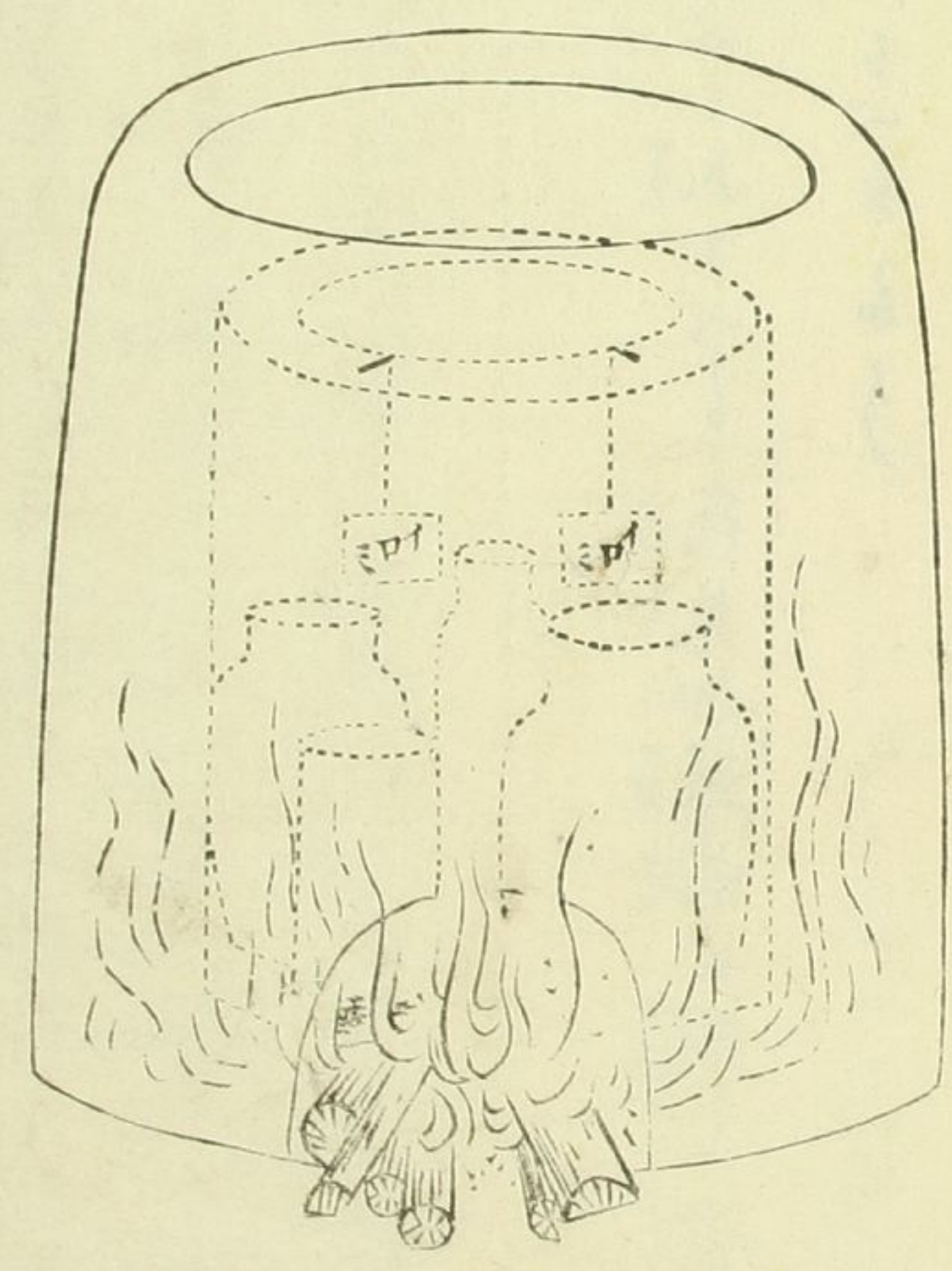
如圖くい

火よりろす



は乍まで火気の登るを見て其度を計り上の廻りへの
 いらけを詰火の消ぬようにならして蓋を冠せ釜の口を
 嚴重に塞き凡そ五十分程置て後再び蓋を取除前より下
 たる色見を取出し水へ入て金盛繪の具等を能々檢察
 焼付たれば即時ふかいらけ並びに火供み取除て後
 凡そ三時間置冷氣に至る量て陶器を取出さべし
 又曰色見を取出したる持繪の具等焼付されば迹の色
 見を凡そ十分程入て置其後取出せし必き出来する者

あり亦火を消し内外の釜へ少くおても水の気懸るを
 一の全鉢の焼不出来とあるゆへ火を消さんとする時
 釜より火を
 取出して消し
 心のあり
 焚釜の模様
 焚釜の二尺以
 上と知るべし



焚釜たきかま小入こいりる陶器とうきハ燒加減やまかへん九こ五時間ごじかんと心得こころえべし此焚こ
方かたハ墨火すみびと異ことふ左ひだり小其圖そのづを出ひきき燒方やまかたハ墨釜すみかま小同おな
く焚物たきものハ松薪まつまき小限くぎるあり一釜かまの焚物たきもの代かへり九こ現今げんこん五十
錢位せんゐと定さだむ

但た薪まきハ三本位さんぽんゐづ入いるべし色見加減いろみかへん前まへに同おなく冷氣れいき
度量どりやう五時間ごじかんと知しるべきあり

仕揚しあげの次第しだい

燒揚やまあげたる陶器とうきハ新藁あらわら又またハ餅糠もちぬか小てこ宜敷よろしく燒付やまつけたる

浮繪うきゑの上うへを徐々じゆじゆと出でせるべし或あるハ金色きんいろを出いきふハ
瑪瑙めのう玉たま小磨こき或あるハ底そこき處ところを磨こぐ小水牛すみぎうを以もつて
能々よくよく磨こぐべし總すべて仕上しあげハ角粉かくこなを付つけて鹿かの皮かわ小磨こ
き上あるあり右みぎの如ごとくふして全またく出い來きき

陶器画工秘傳書 大尾

明治十七年四月四日御届
全 年五月 出版

定價五十錢

編輯人

東京府平民

江藤時太郎

浅草區福井町丁百十一番地

出版人

全

森川林三郎

京橋區松川町一番地

東京書肆賣捌所

鈴木常助發兌

日本橋區通三丁目十番地

東京地本同盟組合章



相生所立丁目

水野松太郎

相生所横

子

47

福宮町丁目

大野
在松太郎所